

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ③

経典の成立

仏教における最古の聖典としては、前号で紹介したパーリ語原始仏典があげられる。これは三蔵とも呼ばれ、サンギーティによって整理された釈迦の教えを纏めた「スートラ（経）」、教団における規律や道徳を纏めた「ヴィナヤ（律）」、それらの論理的解説を纏めた「ダルマ（論）」に分類される。この中でも特に重要なものが「スートラ」である。一般的に仏教でお経と呼ばれるものの類は、この「スートラ」に起源をもつ。しかし、この「スートラ」は、仏教だけに用いられたものではなく、実はそれ以前のバラモン教や同時期のジャイナ教においても重要視されていた。さらに仏教誕生以後、思想的に発展したインドの諸哲学派においても、その要諦に関する文献は「スートラ」と称されてきた。

語源的に「スートラ」は、「一本の糸」を意味する。インドでは可憐な花に糸を通して花輪をつくり、首にかけて祝福や敬意を表す習慣がある。その花輪から発展して、この「スートラ」という語は、重要な金言や優れた文学的表現に用いられるようになっていった。特にバラモン教においては、天啓聖典ヴェーダの主要部が「シュラウタ（天啓）・スートラ」、家庭における祭儀書が「グリhya（家庭）・スートラ」、人生における規範や道徳など法典が「ダルマ（法）・スートラ」と称されている。それらは、韻文・散文形式で整理され、今日まで受け継がれている。このようなバラモン教の「スートラ」の伝統は仏教においても踏襲され、釈迦入滅後、サンギーティを経て彼の教えは「スートラ」として体系的に纏められた。部派仏教の時代には、出家者はこの三蔵の習得に没頭したため、結果的に世の人々の救いの現場から距離を置くようになっていった。そして教団は、教えの研究機関としての傾向が強くなっていく。一方、日常生活に根差した釈迦の素朴な「ことば」に救いを求めていた一般の人々は、次第に救済の基盤を失い、教団から遊離すると、それまでタブーとされていた仏像崇拝や、釈迦の遺骨崇拝から発展した仏塔建立など、独自の信仰形態を生み出すようになった。そのような新しい信仰運動は、厳格な出家主義に基づいた上座部仏教とは異なり、出家在家を不問とする新しい仏教へと発展し、仏教史における一大変革をもたらした。これが後の大乘仏教誕生の淵源となったのである。

仏教における「スートラ」の形式は、基本的には「如是我聞（かくの如く我聞けり）」の語句で始まる。これは、まず、釈迦から聞いた教えに対する全面的な信頼の表明と、一切の疑念を差し挟まないという誓約として用いられたようだ。この「如是我聞」は、釈迦入滅直後の第一回目のサンギーティにおいて、多聞第一と称され、釈迦の説法を一番多く聞いたとされる仏弟子アーナンダが、まずはじめに「かくの如く我聞けり」と自身の記憶を述懐し説法したことに起源をもつと伝えられている（水野、24: 1990）。したがって仏教、特に初期仏教における「スートラ」は、釈迦から直接聞いた説法を示唆するものであり、三蔵における他の「ヴィナヤ」や「ダルマ」とは明確に区別されていた。

他方、仏教が中国に到達して以降、仏典の漢訳作業が進められるようになると、それらの漢訳仏典としての「スートラ」は「経」と訳されるようになった。仏教伝播以前から中国では儒教の教えなどが筆記された竹片などにたて糸を通し、それを綴

じて保存する習慣があった。そのたて糸を「経」と呼んでいたことから、聖典そのものを「経」と呼ぶようになった（水野、17: 1990）。そして漢訳された仏典も同じように「経」と名付けられるようになった。ただ、仏教が広まった当初は、三蔵の「経」「律」「論」という分類が明確に認識されず、中国人訳経僧らは、伝わってきた仏典すべてを「経」と称して漢訳していたようだ（水野、17: 1990）。

さて、上述の通り釈迦入滅後、教団の在り様が次第に変容すると、釈迦に対する見方も変化していった。歴史的な人物としての釈迦は、いわゆるブツダ（覚者）として人々の尊敬を集めつつも、教団においては他の出家者と同じように剃髪し、同じような粗衣をまとい、共に修行し瞑想していた（中村、507: 1988）。一見、誰が釈迦なのか分からないほど彼の外貌には一般の出家者と何ら異なる点がなかった。しかし、彼の入滅後に纏められた最古層の経典に表現される釈迦と、比較的新しい層に分類される経典に見られる釈迦とではかなり相違がみられる。それらの経典における釈迦に対する尊称の変化を確認すると、人間としての釈迦の姿が、次第に神格化していく過程が領解できる。つまり経典成立の過程から、一出家者による悟りとしての「教え」が、仏教という一大宗教に発展する道程が浮かび上がる。後に画家や彫刻家が表現した釈迦、つまり光輪を伴って弟子たちに取り囲まれた美しい釈迦像とは、歴史的事実としては誤謬であり、実は後世の仏教徒が思い描いた釈迦の理想像だったのである（中村、508: 1988）。

彼の悟りにはもともと神秘的な要素や超自然的な能力ではなく、彼はただ「法」を悟り、人々にそれを伝えた。したがって、最古層に分類される経典では、釈迦は弟子たちに「シャカよ」、「君、ゴータマよ」あるいは「釈迦族の子よ」と呼ばれ、あくまで人間として表現されていた（中村、487: 1988）。それが次第に優れた先達として「人間のうちで最上の人」や「一切のいきものうちで最上の者」と仰がれるようになり、仏教が王権による手厚い保護を受けたマウリヤ王朝時代（紀元前3世紀頃）には、釈迦の偉大性のみが極端に強調されると、釈迦は神的存在として表現され、「神々の神」や「神々を超えた神」などと呼ばれるに至った（中村、511: 1988）。

これはまさに、人間による悟りとしての彼の教えが、超越的な存在による永遠なる真理として昇華されたことを意味する。このような経典製作者による思想的な変革を経て、釈迦という一人の人間の悟りから、「仏教」という特殊な宗教が誕生することになった。さらには、インド的な輪廻の思想観念とも結びつき、釈迦の過去生について様々な想像が前世譚として付加され、「過去仏」などの教理的変容が展開されていく。そして、古い経典などに改訂が施され増補されつつ、釈迦直伝如何にかかわらずすべて「仏説」、つまり釈迦が説いた教えとして夥しい数の経典が製作されていくと、それらは大乘仏教という揚棄的思想体系の枢軸として人々に受容されていった。

[引用文献]

中村元『ゴータマ・ブツダ - 釈尊の生涯 -』春秋社、1988年 第10刷。
前田恵学『原始佛教聖典の成立史研究』山喜房佛書林、1975年 第3刷。

水野弘元『経典—その成立と展開』佼成出版社、1990。